

目 次

刊行にあたって ii

第1章	Be 動詞の過剰生成と時制の獲得 遊佐典昭 大滝宏一	1
第2章	日本語母語話者による英語非対格動詞の過剰受動化現象に関する考察 —主語名詞句の有生性と動詞の完結性の観点から— 白畑知彦 近藤隆子 小川睦美 須田孝司 横田秀樹 大瀧綾乃	31
第3章	日本語の主節現象に関する第二言語習得研究 木津弥佳	57
第4章	目的語省略文にみる中国人日本語学習者の L1 転移と逆行転移 —省略の有無と有生性が転移にどのように影響するのか— 澤崎宏一 張昀	87
第5章	日本留学前後に見られる日本語を話す力の発達 —プロフィシエンシー（言語運用能力）と流暢性— 岩崎典子	129
第6章	日本語母語話者による L2 英語と L3 ドイツ語の音声習得 —語末閉鎖子音の発音について— 安田麗 上田功	159
第7章	第三言語における発音されない項の獲得 —日本人スペイン語学習者の L3 文法を例に— 宮本陽一 山田一美	177

第 1 章

Be 動詞の過剰生成と時制の獲得

遊佐典昭 大滝宏一

1. はじめに

英語の時制 (tense) は英語の初学者がつまづきやすいだけでなく上級レベルになっても産出に問題があることが知られている (Lardiere, 2007)。具体的には, (1a) を使うべきところで (1b) のように「三人称単数現在の *s*」を省略してしまう場合と, (1c) のような「**be 動詞の過剰生成 (be-overgeneration)**」などがある。

- (1) a. Naomi often *plays* tennis.
- b. *Naomi often *play* tennis.
- c. *Naomi *is* often *play* tennis.

(1a) に見られる動詞 *play* の接尾辞である *-s* (三人称単数の *-s*) は**屈折形態素 (inflectional morpheme)** であるが, Dulay & Burt (1974) の形態素の獲得順序付けの研究以来, 「三単現の *-s*」は第二言語使用者には難しいことが多くの研究で指摘されてきた (従来の研究のメタ分析に関しては, Goldschneider & DeKeyser (2001) を参照のこと)。この問題は, 今日のコミュニケーションを重要視する英語教育においては, 三単現の *-s* を落としても意思の疎通には大きな影響を引き越すとは考えられないために, 以前の文法機能を重要視する英語教育ほどは問題視されていないと思われる。また (1c) に見られる *be* 動詞の過剰生成は, 英語教育の現場でしばしば観察されてきたが (Thompson, 2001), 一般動詞と *be* 動詞の区別ができていないことに原因があるといった

第2章

日本語母語話者による英語非対格動詞 の過剰受動化現象に関する考察

主語名詞句の有生性と動詞の完結性の観点から

白畑知彦 近藤隆子 小川睦美
須田孝司 横田秀樹 大瀧綾乃

1. はじめに

英語を第二言語として習得する学習者が、非対格動詞 (**unaccusative verb**) を過剰受動化 (**overpassivization**) して産出することが知られている (Balcom, 1997; Ju, 2000; Yip, 1995; Zobl, 1989)。非対格動詞については後ほど詳述するが、ここではひとまず自動詞の一種類であると捉えておいていただきたい。自動詞であるため、受動態構造を取らないが、英語を習得途上の第二言語学習者が非対格動詞を受動態の構造で使用してしまうのである。

具体例を出せば、(1)において、*happen*, *occur*, *fall* はどれも非対格動詞で、(1a), (1c), (1e) の能動態の構造が適切であるのに、第二言語学習者の多くが (1b), (1d), (1f) のように受動化して使用してしまうということである。

- (1) a. A traffic accident happened last night.
b. *A traffic accident was happened last night.
c. A big earthquake occurred last year.
d. *A big earthquake was occurred last year.
e. A pen fell off the dashboard.
f. *A pen was fallen off the dashboard.

第3章

日本語の主節現象に関する 第二言語習得研究

木津弥佳

1. はじめに

文の構造は、大きく分けて命題とモダリティから成り立つと考えられている。例えば益岡（1991）では、「雪が降るにちがいない」という文は、「雪が降る」という述べられる事柄である命題部分と、話者の述べ方にあたる「にちがいない」というモダリティ部分から成り立っているという。生成文法の枠組みにおける統語論では、これまではこのうちの命題の言語現象を主に扱ってきた。しかし近年は、モダリティ等に関わる命題の外の現象にも焦点を当てる研究が数多く提出され、より精緻化された統語的階層を命題の外に仮定することで、談話と統語のインターフェイスに関わる様々な統語現象の説明が同枠組みで可能となってきた¹。

統語論では、文の統語的なまとまり（統語範疇）は階層構造を成すと考えられているが、例えば長谷川（2007）によれば、日本語は IP または TP と呼ばれる統語範疇である命題領域の現象よりも、CP と呼ばれる統語範疇、つまり文の機能やタイプが構造化される命題の外領域に関わる現象が豊富であるという。そうだとすると、日本語の言語現象が CP 領域の理論的な解明に役立つ可能性は高く、また逆に、CP 領域の理論が日本語の談話と統語に関わ

1 例えば Rizzi (1997) や Cinque (1999) をはじめとするいわゆる節の左端部 (left periphery) 構造やカートグラフィー (cartography) 研究などが例として挙げられる。

第4章

目的語省略文にみる中国人日本語 学習者の L1 転移と逆行転移

省略の有無と有生性が転移にどのように影響するのか

澤崎宏一 張昀

1. はじめに

第二言語習得 (second language acquisition: SLA) において、母語 (L1) などの既習言語のくせが、習得中の言語 (L2) になんらかの影響を与えることを、言語転移 (language transfer) と呼ぶ。言語転移はこれまで多くの議論があり、よく知られた L2 習得過程のひとつである。同じ言語転移の中には、逆行転移 (reverse/backward transfer) と呼ばれる現象もあり (Cook, 2003)、特に L2 習熟度が高い場合に、習得した L2 のくせが、L1 などの既習の言語に影響を与えることをいう。このように、言語転移には、L1 から L2 に与える影響と、L2 から L1 に与える影響の2種類があり、本稿ではこの両方を検証する。なお、ふたつの転移を区別するため、以後、前者を「L1 転移 (L1 transfer)」, 後者を「逆行転移」と呼び分けるが、文脈上明らかであったり、特に両者を区別する必要のない場合は、単に「転移」と記す。

調査対象として、日本語と中国語にともにみられる現象でありながら、ふるまいが異なるとされる目的語の省略をとりあげ、省略語の有生性にも着目する。目的語の有生性とその省略のあるなしが異なる日本語文と中国語文を、中国語を母語とする初級・上級レベルの日本語学習者が読み、どのように自然度を判断するかについて調査した。中国語を読むかのように日本語を

第5章

日本留学前後に見られる 日本語を話す力の発達

プロフィシエンシー(言語運用能力)と流暢性

岩崎典子

1. はじめに

1.1 話す能力とは

第二言語 (L2) 学習者が留学すると話す能力が伸びると言われる。しかし、話す能力とはどのような能力で、その能力が伸びるとは、どのようなことなのであろうか。話す能力やその発達については、いくつかの考え方があるが、ここでは、第二言語習得研究の分野で研究が重ねられてきた「流暢さ」と、北米の外国語教育・評価法や日本における日本語教育の分野で影響力のあるプロフィシエンシー (Proficiency) という言語運用能力の概念に注目して、米国から日本に留学した学生の話す能力が伸びたのかを検証するとともに、話す能力とはどのような能力なのかを考える。

1.2 手続き的知識と流暢さ

L2 を話すためには文法や語彙の知識を蓄積するだけでは不十分である。話す行為を遂行するためには、瞬時に既習の文法や語彙を処理するための動的知識が不可欠で、そのような動的知識は、**手続き的知識 (procedural knowledge)** と呼ばれる。この観点からは、話す能力を伸ばすというのは、話すための手続き的知識を習得し、それを**自動化 (automatization)** するこ

第6章

日本語母語話者による L2 英語と L3 ドイツ語の音声習得

語末閉鎖子音の発音について

安田麗 上田功

1. はじめに

小論は日本人ドイツ語学習者の音韻習得、特に阻害音の有声無声の違いに関する論考である。実験参加者は全員大学生であり、中学校から大学入学後まで英語を学んでいるので、英語を第二言語と見なして、第三言語としてドイツ語を習得するにあたって、声帯振動の有無に関する問題点を論じるものである。このように書くと、「英語を第二言語と見なしうるのか」という疑問をもたれる向きもおられると思うので、最初に第三言語の習得について、少々述べることにする。また阻害音や有声無声のような、本論考を理解するために必要な基本概念の解説は3節に、「用語」としてまとめている。

多くの読者は、第二言語習得の研究が我が国で始まった時期に、英語ははたして「第二言語」かという議論が交わされたことを記憶していることであろう。日本語しか話されない言語環境で生活する者が、学校という場で形式的な教授によってのみ教えられる、インプットの少ない英語は、第二言語ではなく外国語であると主張して、第二言語と外国語を峻別しようとする研究者も多かった。筆者らはこの考えにもある程度妥当性はあると考えている。しかしながらそのような時代から約半世紀も経とうとしている現在では状況が変わりつつある。グローバリゼーションの拡大や移動する人々の驚異的な

第7章

第三言語における 発音されない項の獲得

日本人スペイン語学習者の L3 文法を例に

宮本陽一 山田一美

1. 研究の動機付け

発音されない要素に関する研究は、単純に語順の観察だけでは、その特徴・性質、ましてや、その獲得過程を明らかにすることはできないため、理論言語学の知見が必要になる。この点で発音されない要素に関する獲得研究は難しいのだが、だからこそ面白い。この言語理論と獲得研究の間の密接な関係は、近年の日本語の発音されない要素を対象にした研究に如実に現れている。

日本語では、Kuroda (1965) 以来、**発音されない代名詞**の存在が広く受け入れられてきた。たとえば、(1a) の文は動詞しか発音されていないが、この発話がなされた状況から主語と目的語の指示対象が分かれば、適格な文になる。一方、英語では、いかなる状況であっても、(1b) は不適格な文である。

- (1) a. 買ったよ。
b. *Bought.

(1a) は、「買う」という動詞が他動詞であること、また、主語と目的語にあたる指示対象が状況から明らかにされる必要があることから、構造的には